

出題のねらい

㊦は、現代文(論理的文章)の問題です。文化人類学の立場から仮面や儀礼の研究を進めている吉田憲司氏の「仮面と身体」と題する文章から出題しました。世界各地に伝わる仮面を伴う文化事例や儀式・儀礼についてフィールドワークを実施した上での知見と分析から、その文化的側面や宗教的な儀礼との関わりを中心に述べる一文を問題文としました。日常的な局面にも存在する仮面に関わる文化事象も取り上げ幅広く解き明かしていく筆者の視点と主張を的確に読み取れているかどうかを問う問題です。出典が一般読者向けの広報紙であるため文体にも用語にも、深い専門性を必要とするものは見受けられません。具体的事例を示しつつ論じていく筆者の主張を、どれだけ読み取れるかが分かれ目になってくる問題です。

㊧は、17世紀中頃に成立した、仮名草子作家として知られる浅井了意が、既存の随筆『可笑記』に批評を付した仮名草子『可笑記評判』から、友だちの良し悪しについて論じた文章を出題しました。大酒飲みは駄目だ、賭け事をする人は駄目だ、親孝行な人が好ましい、といった価値観は現代の我々が昔の人の思想を知る上でも、興味深いものではないでしょうか。江戸時代の文章は古典の中でも比較的読みやすい方ですが、出題文は『可笑記』とそれに批評を加えた『可笑記評判』の文章とが並記されています。二者の主張をそれぞれの確に抑えるためには、基本的な古文単語の理解、正確な文章読解力が求められます。解答では、これらが習得できていないための誤答が多く、全体的な正答率も低かったです。基礎的な古文単語の学習と、語釈に基づいた現代語訳を繰り返すことで、古文への理解向上を目指してください。

㊦
【解答】(50点)

問一	a 一様	b 酷似	c 祭典	d 歓待	
	e 享受				(2点×5)
問二	A ア	B エ	C ウ	D イ	(3点×4)
問三	II				(4点)
問四	ア				(4点)
問五	イ				(4点)
問六	エ				(4点)
問七	生身の人間				(4点)
問八	歴史的変化によって芸能や遊びにも用いられるようになった仮面は、宗教的体験と無関係な扱いも受ける場もあるということ。				(8点)

【解説】

問一 漢字の知識を測る問題です。全体的にはよくできていましたが、完答できる受験者は少なかったようです。誤答としては、c「典」を「展」で書くもの、d「歓」を「観」で書くもの、e「享」の字体を正確に書けないものが目立ちました。論理的文章での漢字問題では、論述用語や日常の報道文などでよく見かける語を中心に設問化しています。漢字学習を単なる知識の蓄積としてとらえず、文章を読み解くキーワードを把握するものとして学習することもここがけてください。

問二 語彙力、および文脈に合致する言葉を選び取る思考力・判断力をみる問題です。全体的によくできていました。空欄補充問題は、例年出題されるとおり、筆者の論旨の展開に関わる語を出題部分としています。こうした問題での設問選択肢は、「しかし」、「あるいは」などの接続詞、「あくまでも」のような副詞を出題することがほとんどです。接続詞は、文章相互の関係を整理し論旨の展開を明確にします。また、副詞が論理的文章で用いられる場合、筆者の意志や判断を表明しようとする文脈に現れることが多い傾向があります。その主張を読者に的確に伝えることを強く意識した箇所と言えます。空欄への正確な補充には、文章全体の構造の把握、前後の文の関係把握だけではなく、全体の論旨を踏まえた選択にここがけてください。

問三 脱文挿入問題です。文章全体の流れや構造の把握が出来ているかどうかを測るために出題しました。脱落分として使用した一文は「いずれにせよ」で始まります。それまで述べてきたいくつかの具体的な事例を取りまとめて論評するスタイルであることに気がつけば、正答を得ることは容易だったはずですので、あらかじめ脱文の挿入位置も指示してありますので、それぞれの位置の直前段落やそこまでの文脈の流れを確認してみてください。

問四 文の導入部の読解がしっかりと出来ているかを選択肢形式で問い、思考力・判断力を測る問題です。全体的によく出来ていました。導入部の論述では、仮面の使用時に生じる特徴的な感情の動きを、具体的な事例をあげつつ指摘していきます。そうした感情が集約的に示されたのが傍線部①となります。そうした段落構造に気がついていれば、正答は容易に得られるはずです。

問五 筆者は、傍線部②で始まる段落で、地域や時代に左右されない仮面の共通特性を説明しています。

傍線部は、あらかじめその内容を要約し提示しておく一文であると言うことに気づいているかどうかを測るために出題しました。この文構造を把握できる思考力・判断力を測るための選択肢問題です。アは当該段落以前の文脈をまとめたもの、ウ、エは部分的な指摘であると同時に文脈を読み誤っていません。

問六 筆者は、一つ手前の段落で示された仮面の普遍的な特性についての分析を受けて、傍線部③の含まれる段落では、さらに一步進めた考察を述べています。その段落構造の正確な読み取りから思考力・判断力をみる問題です。段落間の関係を構造的に把握しながら読み進めていくのは、論理的文章を読解する際には必須の要件です。選択肢形式にしたためか問題としては解きやすい傾向にあったようです。傍線部前後に段落を越えて現れる「コントロール」の語が、正答を得るためのキーワードでした。

問七 筆者は、文章全体の冒頭部を受けて、いったんこの段落で論旨をまとめようとしています。この照応に気がついていれば、冒頭段落に立ち返って当該箇所を探ることになったでしょう。論説的な文章では、まとめの部分でここまで述べたことを振り返りつつ、要点を述べる手法がしばしば見られます。キーワードとなる語句をしっかりと把握しておくことが、こうした形式の問題には大切です。正答箇所がやや離れた位置にあるためか、正答率は低い傾向でした。

問八 傍線部⑤は、段落の結びに向けて儀礼と仮面の関係性に考察を加えています。儀礼における装着時には憑依との強い関連性を見せながらも、宗教性の薄い側面での仮面のあり方にも追加説明を加えています。設問化した傍線部④は、その文脈にあります。この文脈構成の把握と本文終結部の論旨が読み取れているかどうかをはかり、思考力・判断力をみる問題です。文脈構成の把握がかなえば、文末数段落の要旨を読み取ることで正答は導かれます。その上で、把握した内容を自分の言葉で適切に要約する表現力をみる問題です。論旨を読み取り自らの言葉で要約することは、論理的文章を正確に理解するためには重要な作業です。日常的にも、文章に接する際の習慣として身につけておいてください。



【解答】(50点)

- | | | | |
|----|----------------------|-------|---------|
| 問一 | ① ふんべつ | ② すき | (2点×2) |
| 問二 | ウ | | (3点) |
| 問三 | 酔っ払わない人は、いつも酒を愛飲してよい | | (5点) |
| 問四 | 乱 | | (4点) |
| 問五 | ④ ア | ⑤ イ | (3点×2) |
| 問六 | 交際して | | (5点) |
| 問七 | あらゆることに私利私欲で動く役人 | | (5点) |
| 問八 | (a) ア・イ | (b) ウ | (c) エ・オ |
| | | | (10点) |
| 問九 | ウ | | (4点) |
| 問十 | ア | | (4点) |

【現代語訳】

昔、ある人が言ったことには、日常的に親しく、昵懇にするのが良い友だちがいる。慈悲深い人、義理堅い人、慇懃な人、勉強家な人、主君に忠義心のある人、戦場で武功をたてた人、親孝行な人、分別のある人、医学に通じている人、正直な人。

また、友だちとするのに相応しくない人がある。心がひがみっぽい人、好色な人、いつでも大酒を飲む人、趣味人、短気な人、喧嘩好きな人、嘘をつく人、おごっている人、欲深い人、臆病な人、忠義心がなく、親不孝な人。

(右の文章を) 批評して言うことには、悪い友だちの中に、いつでも大酒を飲む人(を挙げているが)、酒を好むことが悪い、と言うならば、酒というのは限度がないので、酩酊しない人なら、いつでも好んで飲んで良い。それだけでこれを嫌うべきではない。もしもまた、大酒を飲んでその結果酔っ払うような人であるなら、これは「乱におよぶ(酩酊する)」というものだ。(こうした状態は今更言うまでもなく) もともと聖經の戒めである。そうであるから、「酔狂する人(酩酊する人)」と書いていましたら、その通りであったろう。

次に、「数寄者(趣味人)」というのは、これは道人(その道の達人)のひとつで、(彼らは)清廉潔白かつ静寂を好み、欲というものを忘れ、感情的にならない人達である。時々(彼らと)交際して、自分自身の心の汚い部分を洗い流すのが良い。どうしてこれを悪友の数に入れようか。この人(『可笑記』の著者)の前には、廬全・陸羽・趙州といった、唐代の数寄者も、長く浩然の気を養ったことを恥ずかしがるであろうよ。(こうした悪友に相応しくない人達を挙げているのに) 未だに極めて悪い友だちというのがあるのを記載していない。それは盤上(ボードゲーム)を好んで、生活のための金銭を顧みない人、賭博に熱中して、法律を破る人、悪口を言っ

一般入試／国語(中期)

て、周囲に気遣いできない人、いつも人の陰口を言う人、一様に私利私欲に走る代官である。

【解 説】

問一 基礎的な古典知識を問う設問ですが、どちらも正答率は低めでした。「分別（ふんべつ）」・「数寄（すき）」は現代語でも同じ読みをして、使われています。日常に息づく古文単語は意外に多く残っています。日ごろから漢字とその読みに慣れ親しむようにしましょう。

問二 「乱におよぶ」の意味を理解しているかを問う設問です。後に作者は「酔狂する人」と書けば良かったのに、と述べていることから、「乱におよぶ」とは「酔狂する」と同義になります。つまり、「酔っ払う」まで飲むな、ということです。

問三 問二を踏まえて、現代語訳の問題です。「乱におよぶ」ばなければいつでも飲んで良い、ということで、「乱におよぶ」は「酔っ払う（酩酊する、正体を失う）」の意でしたから、「酔っ払わなければいつでも好みに飲むのが良い」ということになります。この助動詞「べし」は適当（～するのが良い）になります。

問四 問二・問三を踏まえた抜き出し問題です。空欄につづけて「におよぶ」とあるので、前の「乱におよぶ」から「乱」を抜き出せば良いのですが、正答率がひじょうに低かったです。

問五 品詞を問う設問です。「しからば」は「～ば」とあるので、逆接ととりそうですが、これは順接です。間違えやすい品詞なので、よく覚えておきましょう。「しかるべき」は「しかり」に「べし」がついたもの。ラ行変格活用「しかり」は「その通りである」の意、助動詞「べし」はここでは「推量」になります。

問六 語句の意味を問う設問です。「数寄者」と時々「まじは」って自分の汚い部分を洗い流そう、という文脈ですので、これは「交際する」「交流する」になります。ひらがなで書かれていたためか、「まじはる」＝「交わる」＝「交際する」と変換できず、正答率はひじょうに低いものとなりました。ひとつの言葉から色々な単語を連想できるよう、語彙力を培ってほしいです。

問七 短い文章の現代語訳です。悪友というのは、賭博する人、悪口を言う人……ときて、最後に「ともかくにも私利私欲に励む代官」（が一番友人にし

てはいけない人間だ）と落とすことで、世情批判も盛り込みながらも、軽妙洒脱な、ひじょうに上手い随筆文ができあがっています。「わたくしする」＝「私する」、ここの「私」とは何か?と考えて、「私利」「私欲」といった熟語が出てくるようになると良いですね。

問八 『可笑記』・『可笑記評判』それぞれの主張を理解しているかを問う設問です。部分部分で合っていても、完答はほとんど見られませんでした。

問九 本文の主題が抑えられているかを問う設問です。「よき友」「あしき友」の両方について書かれているので、「よき友あしき友だちの事」が正解です。イ「あしき友だちと交はらざる事」との誤答がありましたが、『可笑記』も『可笑記評判』も、「よき友」についても言及しており、不適です。

問十 文学史の問題です。『折たく柴の記』は正徳の治でも知られる儒学者新井白石が晩年に著した随筆です。『伽婢子』は『可笑記評判』の作者浅井了意が中国の怪異小説を翻案した仮名草子、『日本永代蔵』は大坂の町人文学の第一人者井原西鶴が著した町人物浮世草子、『吾妻鏡』は鎌倉時代の歴史書、『湖月抄』は歌学者北村季吟が著した『源氏物語』の注釈書です。『吾妻鏡』以外は江戸時代の文学作品で、馴染みのない人も多かったようです。正答率は低めでした。